20）膀胱に発生した褐色細胞腫の1例

塩谷　淳・小田　純一（新潟大学放射線科）
椎名　真
武田　正之（同　泌尿器科）

症例は27歳の男性で，22歳時の高血圧（180/120）を初発症状に頭痛・動悸・口渇・多尿・排尿時発作が徐々に出現した．血圧は排尿後や直腸指診時に上昇がみられ190～220/120～130であり，空腹時血糖 166mg/dl，1日尿糖 8.4g/日，尿潜血＋2，尿中 VMA＋1，眼底は K-W Ⅳ群，ノルアドレナリンは血中・尿中ともに著明に上昇していた．経直腸エコー・CT・血管造影・静脈血サンプリング，膀胱鏡が存在診断に役立ったが，期待された $^{131}$I-MIBG シンチでは異常集積は認められなかった．膀胱全摘術が施行され，頸部に径約 4.5cm の筋層に限局し，リンパ節移転のない褐色細胞腫が確認された．術後9ケ月たつが現在まで他臓器へ転移は認められていない．本例は本邦第18例目の膀胱褐色細胞腫で，又術後障害の面からは早期発見が望まれた症例であった．

21）当院における肝動脈塞栓術の治療効果

楠田　順子・岡田　稔
木村　弘志・似鳥　俊明（杏林大学放射線科）
若狭　勝秀・是永　建雄
蜂屋　順一・古屋　儀郎

目的；我々は1981年から1987年3月までに当院及び関連病院において肝動脈塞栓術を施行した104例の原発性肝細胞癌を対象として治療効果と予後に及ぼす因子を検討した．

方法；肝動脈塞栓術を施行した104例の治療効果を累積生存率から検討し，さらに Gelfoam 単独例53例と，Gelfoam，Lipiodol 併用例51例においての累積生存率を比較検討した．予後に及ぼす因子として，門脈浸潤の程度，腫瘍径，被膜及び，肝内転移巣の有無について検討した．

結果；本療法による累積生存率は，1年生存率49%，2年生存率25%，3年生存率9%で，現在最長生存者例は4年1カ月であった．Gelfoam 単独例と Gelfoam，Lipiodol 併用例での生存例では明らかな差は認められなかった．腫瘍径では長径 10cm 以上では予後不良で，門脈浸潤3次以下の門脈閉塞例での予後が良好であった．又，被膜のあるもの，肝内転移巣のないものの予後が良好であった．

22）腹部超音波検査にて胆嚢内腔描出不能例について

前田　春男・黒川　茂樹（新潟市民病院放射線科）
横山　道夫

当院で約3年間に経験した13例について検討した．内訳は，磁器様胆嚢6例，胆嚢の小さい例6例，胆嚢内結石充満1例であった．

磁器様胆嚢は，6例とも X-p 上石灰化影が同定できた．CT が，胆嚢壁に石灰化があることを証明するのに有用であった．石灰化の形状から，5例は，広く帯状に石灰化の見られる型，1例は，多発性の点状の石灰化のみられる型であった．1例に胆嚢結石が合併していたが手術前には診断できなかった．癌の合併例は，なかった．胆嚢の小さい例では，最小のものは5×15mm 大であったが，CT または，DIC で全例，胆嚢の同定は可能だった．しかし，先天性に小さいものか，慢性胆嚢炎により小さくなったものかの鑑別は，できなかった．胆嚢結石例は，胆嚢内に5×3cm 大の大きい結石のあった例である．

---

## 第18回新潟画像医学研究会

日　時　昭和62年10月31日（土）
午後2時より
会　場　新潟大学医学部　第Ⅱ講義室

### 一　般　演　題

1）顎関節に対する二重造影検査について

高瀬　裕志・二宮　秀一
江口　徹・北村　信安（日本歯科大学新潟歯学部放射線科）
前多　一雄

顎関節は顎口腔系機能と密接な関係にあるため歯科領域では重要な部位であり，顎関節に対するX線検査の意義は大きく，単純撮影や断層撮影が一般的である．しかし，近年，発現頻度の高い顎関節症では骨変化の生じる割合は低く，関節円板などの軟組織に異常が生じる場合が多いため，これらの検査法のみでは的確な診断を行なうことは困難である．従来，顎関節軟組織の観察には陽性造影剤による単純造影検査が施行されてきたが，最近，二重造影法を顎関節に応用して軟組織のさらに詳細な把握が試みられている．当放射線科でも，これまで約100例に対して本法を施行し良好な造影像を得ているのでそ